

につき、その比較や臨床応用上の問題点などにつき報告した。今回は PI の胆のう検査法への応用を検討したので報告する。

まず同一症例における検討成績から胆道および胆のうへの集積は、HIDA より PI が早いことがイメージ上からも、またカウントからも確認出来た。胆のう収縮能をみる方法として、ダイヤン13 g 経口投与法とセルレイン 10 µg 筋注法を比較したところ、ダイヤンは一部の症例で再現性が悪く、また十分収縮効果を示さない場合があったが、セルレインは短時間に確実な効果を示すことが認められた。イメージを得る条件としてパラレルコリメーターとピンホールコリメーターの比較、および平常呼吸時と呼吸停止法との比較を行ったところ、ピンホールコリメーターを用い呼吸停止法を採用した際、より明瞭な所見がえられた。一方、胆石症患者で胆のう描出が可能である症例の経過観察から手術時期の決定に PI による胆のうイメージングが有用との成績をえた。さらにこれら一連の検査にはイメージによる観察のみならず、カウントの推移を合せることで、一段と診断精度をあげることができた。

18. 肝胆シンチグラフィへの Tc-99m-PI の使用経験

鈴木 雅紹

(県立尼崎病院・RI)

野本 修平 池袋 英一
(同・内)

^{99m}Tc -ピリドキシレインソロイシン(以下 PI と略記)を、使用する機会を得たので、その体内での様態および分布について報告する。

対象：肝腫瘍群5例、肝炎症群10例、閉塞性疾患群7例、その他3例、コントロール群2例の合計27例、内男13例、女14例を対象とした。その年齢分布は24～73歳であった。

方法：被検者に PI 静注後、2時間まで、経時に、ガンマカメラで上腹部の撮影を行なうとと

もに、関心領域(ROI)によるヘパトグラム、大腿部における体外計測、採血および採尿を行ない、体内様態を検討した。

結果：肝画像で不鮮明なものが、腫瘍群で20%，閉塞性疾患群で29%，胆のう画像で不鮮明なものが、腫瘍群で40%，閉塞性疾患群で71%を占め、閉塞性疾患群の撮像が困難であった。血中クリアランスおよび体外動態計測曲線は、2～3の様相を呈した。これらの halftime ($T_{1/2}$) は、肝炎、肝硬変、閉塞性疾患の順に遅延する傾向が観られたが、各群の偏差が大きかった。大腿部計測において、特に閉塞性疾患で摄取相が認められた。血中残存率は、肝外閉塞性と肝内性とのオーバラップがあったものの、肝炎、肝硬変は有意差があり、また血漿ビリルビン測定との間に相関が観られ、肝機能を反映すると考えられた。

結語：(1) PI による動態測定、特に血中残存率は、肝障害の程度を反映し、有効と考える。(2) PI の肝よりの排出に関して、肝外閉塞性群が特に遅延し、肝外性であることを強調しているものと考え、今後検討を重ねたい。

19. ^{99m}Tc -PI の使用経験

長谷川義尚 中野 俊一

井深啓次郎 塩村 和夫

石上 重行

(府立成人病センター・アイソトープ)

^{99m}Tc -PIによる肝胆道系シンチグラフィーを28例に試みた。 ^{99m}Tc -PI, 5 mCi を投与し、10分間隔で経時的に60分迄撮像し、症例によっては2, 3, 4および24時間像を得た。胆のう像は結石および胆のう疾患症例の大部分で造影不良乃至陰性であった。総胆管像のみられなかつた6例のうち3例は肝硬変例で、これらの例ではいずれも腸管への排泄に遅れがみられた。一方、総胆管の拡張所見のみられた7例のうち6例は総胆管結石あるいは脾癌等による胆管の通過障害を有する例であった。肝内胆管像のみられた10例のうち7例は通過障害